

談

三年 15
筆順 言 讞 談
オン ダン
クン

成り立ち



「火」二つと「言」とを組み合わせて作った字です。「火」が次から次へともえうつるように、話が次から次とうつる」ことを表した字です。【例談笑】

「長く続く話（ものがたり）」といういみに使われます。【例講談、史談、美談】

また、「ある特定の事について話し合う」ことはいみにつかわれます。【例相談、対談、談判】

使い方

▽ぼくのおじいちゃんは、講談や落語を聞くのが好きです。とくに、美談や、人情話などが大好きで、何度聞いてもあきないようです。

熟語例

- ▽談笑（笑いながら気楽に次から次へと話し合うこと。「二時間あまりも談笑が続いた」などというふうにかいいます。）
- ▽講談（武勇伝や政談などのものがたりを、調子をつけて語る芸。また、そのものがたり）
- ▽史談（歴史上のものがたり）
- ▽美談（美しい、感動的なものがたり）
- ▽相談（あることについて、どうしたらいいか話し合うこと。「何をして遊ぶか、友だちと相談した」などというふうにかいいます。）
- ▽対談（向かい合って話し合うこと。）
- ▽談判（あることの始末をつけるために話し合うこと。）
- ▽懇談（うちとけて話し合うこと。「先生と父母との懇談会が設けられた」などというふうにかいいます。）

着

三年 12
筆順 ソ ヤ 羊 着
オン チヤク・シヤク
クン きりる けせる・つりく けける

成り立ち



「羊」と「目」とを組み合わせて作った字で、「羊の皮で作った着物」が、よく人の目に「着く」ことをあらわしたものです。「着物」といういみ、「着る」といういみ、また、「人の目に「着く」といういみにつかわれます。また、「着く」は、「行き着く」いみ、「心が落ち着く（沈着）」いみ、「手に着ける（着手）」いみなどにもつかわれます。

「着は、著（年 959）」の字体が崩れたもので、羊と目の会意字ではないが、立派に会意字としても解ける。常用漢字では、チヨと読むのを著とし、チヤクと読むのを着とに分けているが、本来は勿論、その区別はない。」

使い方

▽身に着ける物を着物といいますが、体に着るから着物というのです。着物といえば、狭いいみでは和服のことです。むかしは和服しか着ませんでしたからね。でも広いいみでは、着物は、洋服でもいいのです。着る物は、みな着物です。

▽わたしは着せかえ人形をもっています。色々な服を着せかえてやるのは、とてもおもしろくて、すきです。

熟語例

- ▽到着（行き着くこと。目的地につくこと。「とうとう遊園地のある〇〇えきに到着した」などというふうにかいいます。）
- ▽沈着（心が落ち着いていること。「沈着な行動で、火事から人をすくった」などというふうにかいいます。）
- ▽着手（手を着けること。なにか、しごとをやりはじめること。「新しいけんきゅうに着手した」などというふうにかいいます。）
- ▽着目（目を着けること。目に着くこと。「コンピユータの新しい使い方に着目した結果、すばらしい効果が上がった」などというふうにかいいます。）